

第2表 昭和51年度サル施設経費概要

項 目	金額 (千円)
ケージ補修費	406
ケージ購入費	750
備品費	175
サル購入費	960
サル飼料購入費	6,252
薬品費	876
消耗品費	1,088
人件費	4,861
雑費	523
計	15,891

ニホンザル研究林

ニホンザル研究林施設設置の準備段階として、特別事業(下北)によって下記の調査研究および折衝が行なわれた。

1. 下北半島: 1) 主として食痕、糞内容と直接観察から、年間の食物の季節変化と採食行動の資料を葉積記録した(和田久也との共同研究)。2) これまで知られた約60地点の泊り場のうち25地点について林分構造、植生のなかでの位置・地形的特性の調査を進め、調査記録の検討を行なった(森治他との共同研究)。3) ブナ・ヒバ林の択伐の施業と更新の過程を永久クオドラット(40×40m²)を設けて追跡調査した。択伐天然更新の造林技術的解析と、それにともなっておこる森林植生のサルの生息環境としての変化の予測を行なうことを目的としている。4) 76年12月4日～29日下北I群(易国間川～壺ノ尻焼山沢にかけての地域)を対象に積雪期の土地利用、食物、遊動、個体数、性年齢構成等に関する生態学的調査をおこなった。この期間の調査によってこれまで不明であった東側の利用域の状況が明らかになった。77年2月～3月、M群の調査(前年度より継続)を行なった。重点は、この群れの進みはじめたhabituationの変化と個体群動態の追跡であった。76年秋はブナの豊作、ヤマブドウの豊作があったため、12月、3月ともに普通の年にはみられない特異な遊動パターンを観察した。これは、今後、ニホンザル個体群の生活維持と森林施業のあるべき姿、とを考える枠組を与える重要な知見である。

2. 上信越研究林: 上信越研究林は、志賀高原と木曽の2カ所が含まれるが、今年度は志賀高原研究林候補地に重点をおいた。上信越ニホンザル調査団(代表大沢済)が結成され、1977年2月、群の冬季における寒冷地適応の問題を解明するために、生理、臨床、形態、遺伝、生化学の各分野を総合した研究が行なわれた。19頭を捕獲し、所期の成果をえた。77年3月には、同調査団の

好広真一、常田英士、油田よし子によって、雑魚川、魚野川の生態調査、C群については上記3人に鈴木が加わり、A、B、C群の遊動と社会生活についての調査を行った。これらの諸調査は、研究林設置のための基礎資料として有効に活用される。

3. 屋久島: 1) 集中調査(第4次)、1976年7月15日～8月5日(22日間)にわたり、12名(丸橋珠樹、山極寿一、黒田末寿、油田よし子、好広真一、福田喜八郎、福田史夫、東滋、後藤俊二、熊崎清則、瀬戸口烈司、木下実)による共同調査をおこなった。目的としたのは、研究林予定地を中心とする地域個体群の現状と動態を、継時的につかむことであった。A) 永田一瀬切間の西部林道ぞい、国割岳斜面の国有林(下屋久営林署1～6林班: 研究林予定地)、B) それに隣接する民有林、C) 国割岳西北陵(上屋久営林署)を対象に調査した。全域について群れの分布、群れの大きさをおさえた。4群については性・年齢構成・遊動・群間関係・遊動時のグルーピングなどについてくわしい調査がなされた。2) 丸橋珠樹がK、O群について、3月～12月まで生態学的調査を行ない、自然群のhabituationのもとに、遊動と土地利用の季節的変化の研究をおこなった。研究林予定地域に隣接する国割岳西南の森林生態系の保護に関して屋久島研究グループから関係各方面へ要望書を提出した。

上記のほか、研究林予定地を場としておこなわれた研究活動は、次のとおりである。

鈴木延夫(北大・文)他: 遊動中の群れ内での個体の空間配置に関する研究。

大崎雅一(京大・理): 積雪期の群れの生態学的研究。

大学院学生

昭和51年度における京都大学理学研究科動物学専攻霊長類学学科の学生、指導教官および研究テーマは次のとおりである。

氏名	学年	指導教官	研究テーマ
佐藤 俊	D3	河合 雅雄	ケニア北部に住むレンデュー族の遊牧生活に関する研究
渡辺邦夫	D3	川村 俊蔵	シンパナザルの社会行動
菅原和孝	D2	河合 雅雄	ニホンザル自然群における青年期のオスの成長にともなう社会関係の変遷に関する社会学的研究
平石邦義	D2	川村 俊蔵	モズの社会行動
松村道一	D2	久保田 鏡	霊長類の随意運動の制御におけるシナプス機構の解析